

令和元年6月6日現在

機関番号：37604

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2014～2018

課題番号：26380821

研究課題名（和文）認知症高齢者における生活歴等の情報収集の効果的な活用の開発的研究

研究課題名（英文）Developmental research on effective utilization of life logs, etc. for elderly people with dementia

研究代表者

稲田 弘子（INADA, HIROKO）

九州保健福祉大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：90331149

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、認知症高齢者の生活歴等に焦点をあて、生活歴等の情報収集、施設内共有、施設間連携が円滑に行われるための方法論を構築し、介護者が「その人らしい」認知症ケアの継続を支援できるようになることである。全国の介護保険施設の介護職員、入退所担当職員を対象に多段階抽出法によりアンケート調査を実施した。

研究結果から、施設内・施設間で使用できる生活歴等のアセスメントシートの作成、高齢者自身が記載する「自分ノート（仮称）」の作成、守秘義務の徹底を図るための教育、施設全体で取り組むことを提言する。

研究成果の学術的意義や社会的意義

認知症高齢者の生活歴等の情報収集・施設内共有・施設間連携がスムーズにできる方法論を提言できたことは、認知症高齢者に限らず、高齢者が在宅から施設入所そして看取りまで、継続して「その人らしい」ケアを受けることができる。また、認知症特有のBPSD（認知症の行動・心理症状）の原因や対処法を知る手がかりとなったり、転院等（在宅施設、施設施設）によるリロケーションダメージを早い段階から軽減できるほか、認知症高齢者とのコミュニケーションをはかるためのツールとなるなど、認知症高齢者ケアの有用な方法論となりうる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to focus on the creation of "life logs" for elderly people with dementia, to establish a methodology to facilitate the collecting of information for these "life logs", to share them among facilities, and encourage collaboration among facilities so that caregivers can support people with dementia in living their own lives on a continual basis.

We conducted questionnaire surveys through a multistage sampling method with caregivers and staff members who are in charge of admissions and discharges in facilities covered by long-term care insurance nationwide.

From the research results, the following initiatives were suggested: the creation of an assessment sheet for "life logs", etc. that can be used within a facility or between facilities, the creation of notebooks called "my notebook (provisional name)" written by the elderly people themselves, conducting training to ensure confidentiality, and working on issues through the entire facility.

研究分野：認知症高齢者ケア

キーワード：認知症 その人らしさ 生活歴 情報収集 情報の共有 情報の連携

1. 研究開始当初の背景

わが国における認知症の人の数は、団塊の世代が75歳以上になる2025年には約700万人を超え、65歳以上の高齢者の5人に1人が認知症になるといわれており認知症高齢者は増加の一途をたどっている。

認知症高齢者の支援のあり方として政府が提示した、2015年「認知症施策推進総合戦略」(認知症施策推進総合戦略 2015)の基本方針では、「認知症の人の意思が尊重され、できる限り住み慣れた地域のよい環境で自分らしく暮らし続けることができる社会の実現を目指す」とこととされている。

「その人らしさ」、「自分らしく」という言葉が認知症ケアのキーワードになっている。「その人らしさ」は、英国のTom Kitwoodが提唱したPerson Centered Careに由来する理念である。「その人らしさ」、「自分らしく」を目標にして支援するためには、まずは認知症高齢者その人自身を理解する必要がある。そのための手段として、生活歴等を情報収集し、その情報を施設内のケアスタッフが共有し、ケアに活かすことが重要となる。

認知症高齢者の生活歴等を把握することが、認知症特有の「認知症の行動・心理症状」(BPSD: Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia)の原因や対処法を知ることや、ケアの手がかりを得ることに繋がることはよく知られている。また、介護職員が生活歴等を把握している群は、把握していない群に比べ認知症高齢者に対し、より肯定的な感情を抱くことが明らかになっている。水野は、「認知症の人は、人の心を映す鏡のようなもの」と述べており、介護職員が認知症高齢者の生活歴等を把握し肯定的な感情を抱くことは、認知症高齢者にとっても、ケアをするためにも重要である。

認知症高齢者の生活歴の把握状況に関して、「介護職員は、生活歴等の把握の必要性について認識はあるものの、実際には、生活歴等の情報収集ができていない状況にある」と報告されている。

認知症でなければ、自分がどのように生活していたのかなどの生活歴等を取捨選択し発信することができる。しかし、認知症になると、時間の経過とともに判断力や理解力、コミュニケーション能力がさらに低下し、会話が困難となり、生活歴等の情報提供の可否の判断や発信することができにくくなっていく。

2. 研究の目的

本研究の目的は、認知症高齢者の生活歴等に焦点をあて、生活歴等の(1)情報収集、(2)情報の施設内共有、(3)情報の施設間連携が円滑に行われるための方法論を構築し、介護者が認知症高齢者をより理解することで、「その人らしい」認知症ケアの継続を支援できるようになることである。

【生活歴等の定義】

本研究における「生活歴等」は、本来であれば、Tom Kitwoodが提唱するPersonhoodの概念を内包していなければならない。Personhoodは個を特徴づけている精神の独自性まで含んでいるが、精神の独自性までを対象とすることは困難である。本研究においては、家族構成やキーパーソンなどの基本情報を含め、学歴や職歴、結婚歴、さらに、BPSDの軽減、ケアの手がかりになるような生活習慣、趣味、関心のあることなども含め、「生活歴等」と表現した。

生活歴等の具体的な項目・内容は、「認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式」(認知症介護研究・研修東京センター)、「スウェーデンの認知症高齢者と介護」(ノルディック出版2006)、「軸：自分史回想ノート」(QOLサービス2009)、「人生の記録」(ダスキンホームインスティテッド2014)を参考に、51項目を独自に作成した。(次ページに記載)

3. 研究の方法

全国の介護保険施設を対象に多段抽出法により無作為に抽出しアンケート質問紙によるアンケート調査を実施した。

(1) 生活歴等の情報収集について

調査期間：2014年8月5日～8月31日。

調査対象者：384施設を対象に、各施設より介護職員3名、計1152名を対象に実施した。183名(15.9%)から回答が得られた。

(2) 生活歴等の施設内共有について

調査期間：2015年8月5日～8月31日。

調査対象者：414施設を対象に、各施設より介護職員2名、計828名を対象に実施した。172名(20.7%)から回答が得られた。

(3) 生活歴等の施設間連携について

調査期間：2017年11月28日～12月23日。

調査対象者：576施設を対象に、各施設より入退所業務を担当している職員576名を対象に実施した。162名(28.1%)から回答が得られた。

倫理的配慮として、九州保健福祉大学倫理委員会の審査により承認を得て、研究計画に基づいて調査を実施した。介護保険施設の施設長、調査対象者には、研究目的・方法・協力の任意

性・秘密保持等について、文書で説明し、アンケート調査の返信をもって同意とみなした。

4. 研究成果

(1) 生活歴等の情報収集について

生活歴等の情報収集に焦点をあて、1)認知症高齢者の介護をするのに有用な生活歴等の項目を検証すること、2)生活歴等の把握状況が、基本属性に影響しているのかを明らかにし、認知症高齢者の生活歴等の情報収集が円滑に行われるための方法論を構築する。

有用な生活歴等の項目について

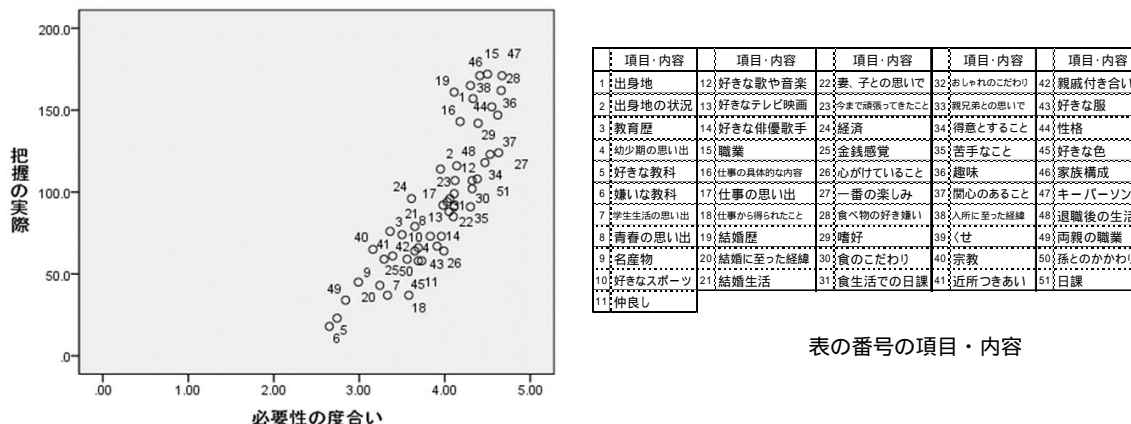
有用な生活歴等の項目を「把握の実際」と「必要性」で検討した。把握の実際（把握者数）については、「している」が1点、「していない」が0点とした。必要性については、必要性が「高い」が5点、「高いほうだ」が4点、「どちらともいえない」が3点、「低いほうだ」が2点、「低い」が1点、「必要ない」が0点とし点数化した。

1)生活歴等の51項目の「把握の実際」と「必要性」の現状について

生活歴等のそれぞれの項目の「把握の実際」の平均値（満点183点）は、 94.6 ± 42.2 点、「把握の実際」が多い項目は、「46.家族構成【172(94.0)】」（【 】内は把握者数、()内は%）、「47.キーパーソン【171(93.4)】」、「15.職業【171(93.4)】」、「1.出身地【165(90.2)】」、「28.食べ物の好き嫌い【162(88.5)】」等であった。

生活歴等の「必要性の度合い」の平均値（満点5点）は 3.91 ± 0.5 点、「必要性の度合い」が高い項目は、「47.キーパーソン【4.67】」、「28.食べ物の好き嫌い【4.66】」、「27.一番の楽しみ【4.63】」、「36.趣味【4.62】」等であった。

2)「把握の実際」と「必要性の度合い」の関係（「把握の実際」と「必要性の度合い」の関係）（散布図）を示す。（図1）



表の番号の項目・内容

図1.「把握の実際」と「必要性の度合い」

生活歴等の把握状況と基本属性との関係について

生活歴等の把握状況が基本属性に影響しているかを明らかにするため、まず生活歴等を「把握している群」、「把握していない群」に分けた。把握状況は、個々の介護職員の把握数を点数化（満点51点）し、4分位点の75%以上を「把握している群」、25%以下を「把握していない群」とした。

その上で次に、基本属性の年齢、介護経験年数、認知症介護経験年数、担当利用者数との比較に関してはt検定を行った。性別、施設の種別に関しては、性別、施設の種別を独立変数、把握数を従属変数とした一元配置分散分析を行った。有意水準は5%未満とした。保有資格は、重複回答のため比較分析を行っていない。（表1-1,1-2）

検定の結果、有意な差はみられなかった。

表1-1. 把握状況と基本属性との関係

基本属性	t検定		
	把握している群	把握していない群	有意確率
年齢	40 ± 11.4	37.6 ± 10.9	0.442
介護経験年数	10.1 ± 4.9	9.8 ± 5.8	0.136
認知症介護経験年数	8.9 ± 4.7	9.0 ± 5.5	0.233
担当利用者数	26.8 ± 19.9	26.3 ± 18.4	0.980

n = 183

表1-2. 把握状況と基本属性との関係

基本属性	一元配置分散分析		
	mean ± SD	有意確率	
性別	男性	25.8 ± 10.8	0.336
	女性	27.6 ± 12.1	
種別	特別養護老人ホーム	27.4 ± 10.0	0.209
	介護老人保健施設	25.8 ± 10.9	
	介護療養型医療施設	23.9 ± 12.8	
	認知症対応型共同生活介護	29.8 ± 12.3	

n = 183

(2) 生活歴等の施設内共有について

生活歴等の施設内共有に焦点をあて、現状や課題を明らかにし、認知症高齢者の生活歴等の施設内共有が円滑に行われるための方法論を構築する。

生活歴等の施設内共有の現状について

生活歴等の共有の必要性について「思う・割と思う」が 98.9%，共有の現状について「できている・割とできている」が 73.8%，情報の更新の実際について「している・割としている」が 65.1%，更新された情報の確認状況について「している・割としている」が 54.8%であった。

また、守秘義務に関して、認知症高齢者の生活歴等の情報を施設外で話す職員は 20.3%であった。

施設内共有の要因について

生活歴等の施設内共有の現状をさらに深める要因を探るため、「生活歴等の施設内共有の必要性」と「生活歴等の共有の現状」・「更新の実際」・「更新された情報の確認状況」と関連があるか、対応のある t 検定を行った。有意水準は 5%未満とした。なお、検定するに当たり、4 項目の質問内容について、「十分/ある・できている」を 5 点、「割合/ある・できている」を 4 点、「どちらともいえない」を 3 点、「あまり/ない・できていない」を 2 点、「ない」を 1 点として点数化した。「生活歴等の施設内共有の必要性」と「生活歴等の共有の現状」・「更新の実際」・「更新された情報の確認状況」との間に有意差 ($p<0.01$) が認められた。

(表 2)

表 2. 施設間共有の現状

質問内容	Mean ± S.D	
生活歴等の施設内共有の必要性	4.90 ± 0.37	} } } } } ** ** ** **
生活歴等の共有の実際	3.83 ± 0.73	
生活歴等の情報の更新	3.69 ± 0.85	
生活歴等の情報更新の確認	3.31 ± 0.82	

n = 172 対応のある t 検定 * < 0.05 ** < 0.01

(3) 生活歴等の施設間連携について

生活歴等の施設間連携に焦点をあて、現状や課題を明らかにし、認知症高齢者の生活歴等の施設間連携が円滑に行われるための方法論を構築する。

生活歴等の施設間連携の現状について

生活歴等の連携について、生活歴等に限定した施設間連携が「できている・割とできている」が 69.7%，生活歴等の必要性について「思う・割と思う」が 98.2%，前施設の生活歴等の情報提供への要望について「あった方がいい・できればあった方がいい」が 96.9%，認知症高齢者に限定せず普段の施設間連携状況について「できている・割とできている」が 83.3%であった。

施設間連携の要因について

生活歴等に限定した施設間連携の現状を深める要因を探るため、「生活歴等に限定した施設間連携」と「生活歴等の必要性の認識」・「前施設の生活歴等の情報提供への要望」・「普段の施設間連携状況」と関連があるか、対応のある t 検定を行った。有意水準は 5%未満とした。なお、検定するに当たり、4 項目の質問内容について、「十分/ある・できている」を 5 点、「割合/ある・できている」を 4 点、「どちらともいえない」を 3 点、「あまり/ない・できていない」を 2 点、「ない」を 1 点として点数化した。(表 3)

表 3. 施設間連携の現状

質問内容	Mean ± S.D	
生活歴等に限定した施設間連携	3.69 ± 0.91	} } } } } ** ** ** **
生活歴等の必要性の認識	4.93 ± 0.32	
前施設の生活歴等の情報提供の要望	4.77 ± 0.57	
普段の施設間連携状況	4.06 ± 0.86	

n = 162 対応のある t 検定 * < 0.05 ** < 0.01

「生活歴等に限定した施設間連携の現状」と、「生活歴等の必要性の認識」・「前施設の生活歴等の情報提供への要望」・「普段の施設間連携状況」との間に有意な差 ($p<0.01$) が認められた。

(4) 自由記述 (情報収集・施設内共有・施設間連携の課題と工夫)

情報収集・施設内共有・施設間連携の課題と工夫 (自由回答) を KJ 法にてまとめた。情報収

集・施設内共有・施設間連携の課題で共通であったのは、【時間がない】【職員の意識・力量の違い】【用紙の不備】であった。また、生活歴等というプライベートな内容であるため【個人情報保護法】、【守秘義務】であった。

情報収集では【認知症の特性】【独居】【家族との関係】【情報の内容に相違がある】等であった。情報の施設内共有では【更新ができていない】【情報自体がない】【ケアに活かせない】であった。情報の施設間連携では【施設の種別の違い】【間違った情報の提供】【提供の限界】等であった。

情報収集・施設内共有・施設間連携の工夫に関しては、情報の収集では【家族へのアンケート依頼】【用紙の活用】であった。情報の施設内共有では【申し送りノートの活用】【会議の場での共有】であった。情報の施設間連携では【事前訪問】【人間関係の構築】【共有シートの活用】【書面でのやりとり】であった。

これらの調査結果から、「その人らしい」認知症ケアの継続を支援できるように、生活歴等のアセスメントシートの作成、高齢者自身が記載する「自分ノート(仮称)」の作成、守秘義務の徹底を図るための教育、施設全体で取り組むことを提言する。

生活歴等のアセスメントシートの作成では、これまでの研究を基に生活歴等の項目・内容を具体的に記載している様式を作成する。その様式は、施設間連携でも使用可能な様式とする。高齢者自身が記載する「自分ノート(仮称)」では、生活歴等の情報は本人個人のものである。箕岡らは、「患者から得た情報は『医療者側の情報』と考えられていたが、1974年のアメリカのプライバシー法、1980年のOECDの8原則、1995年のEU指令等以来、世界的に情報は患者本人のものという考えが強くなった」と述べている。同意は得ているものの、本人のものを第三者が取り扱うため、いろいろな混乱が起きることになる。一方、長崎県大村市では、「大村市版人生ノート」を協働で作成している。これは、認知症などで判断力が低下した場合に備えて、最後まで「自分らしく」生きることを考えるツールとして共同で活用しようとするものである。有効な支援を目指して「大村市版人生ノート」や終活用にエンディングノートが作成されている。

高齢者自身が、認知症になる前から自分自身のことを書き留め、それを転居(施設・病院等)の際持参し、「自分らしく」生活できるよう介護される際の参考にしてもらえるような「自分ノート(仮称)」を作成する。

「自分ノート(仮称)」作成に関しては、高齢者に対し、「認知症になってもその人らしいケアを受けることができる」ためだけ(生活歴等の記載だけ)のものではなく、「自分史」のように書くことによって自分自身を振り返ったり、再発見したり、より自分を客観的に捉え、これからの人生をどのように過ごすのか考えるきっかけになるような内容にしていきたいと考える。

守秘義務の徹底を図るための教育については、生活歴等というプライベートな情報の収集・施設内共有・施設間連携をするためには、守秘義務を厳守して成り立つものである。入職時は勿論のこと定期的に守秘義務の研修を行い、離職時には再度申し伝え、書面での署名の徹底をしていく必要がある。

生活歴等の情報収集の把握状況では、基本属性と有意な差はなかった。このことにより、個人の力量に委ねるのではなく、施設全体で取り組むことが重要である。施設全体で取り組む際には、生活歴等の情報収集は食事介護や排泄介護と同じような介護の位置づけとして捉えることや、情報自体がセンシティブな内容であるため、情報収集・共有・連携の可否を一人で判断するのではなく、複数人で判断することが大切であり、その仕組みを施設内で作らなければならない。

今後は、介護現場の職員の方々の意見を参考にしながら、実践可能となる「形」あるものを作成していきたい。

《引用文献》

厚生労働省老健局高齢者支援課：「認知症高齢者数について」(2012)。

厚生労働省：認知症施策推進総合戦略(新オレンジプラン)(2015)。

長谷川和夫：認知症ケアの基礎。(日本認知症ケア学会編)認知症ケア標準テキスト、3版、4-5、ワールドプランニング(2013)。

稲田弘子・渡邊一平・栗栖照雄：認知症高齢者施設における生活歴把握と介護職員の利用者への感情・思いの現状と両者の関連。介護福祉学、17(1)：66-75(2010)。

水野裕：実践パーソンセンタードケア。初版、114-116、ワールドプランニング(2004)。

小松光代：認知症高齢者のケア技術に関するケアスタッフの重要性認識・実践頻度および家族が希望するケアの比較。介護福祉学、13(2)：136-146(2006)。

認知症の人のためのケアマネジメントセンター方式：認知症介護研究・研修東京センター(2005)。

Britt-Louise Abrahamsson(2003) Demens-omsorg och omvardnad (=2006.ハンソン友子訳)：スウェーデンの認知症高齢者と介護。初版、80-82、ノルディック出版(2006)。

轡・自分史回想ノート：QOLサービス。(2009)。

人生の記録：ダスキンホームインステッド。(2014).
箕岡真子・稲葉一人：高齢者ケアにおける介護倫理。医歯薬出版株式会社，第1版：16-17
67-71(2012).

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計2件)

稲田 弘子, 貫 優美子, 清水 径子, 渡邊 一平, 栗栖 輝雄
認知症高齢者の生活歴等の施設間連携の現状と課題,九州保健福祉大学紀要,査読有, No19,
2018, pp.59-65.

稲田 弘子, 貫 優美子, 清水 径子
認知症高齢者ケアに有用な生活歴等と情報収集のあり方について～その人らしさを支援す
るために～, 介護福祉学, 査読有, Vol.23, 2016, pp.167-174.

[学会発表](計3件)

稲田 弘子, 認知症高齢者の生活歴等の情報収集・施設内共有・施設間連携のあり方につい
て, 日本介護福祉学会大会, 2018. 9.2, 桃山学院大学(大阪府).

稲田 弘子, 認知症高齢者の生活歴等の施設間連携の現状と課題, 日本介護福祉学会大会,
2017. 10.1, 岩手県立大学滝沢キャンパス(岩手県).

稲田 弘子, 認知症高齢者ケアに有用な生活歴等と情報収集のあり方～その人らしさを支援
するために～, 日本介護福祉学会大会, 2016. 9.4, 長野大学(長野県).

[その他]

稲田 弘子

「認知症高齢者における生活歴等の情報収集の効果的な活用の開発的研究」報告書.

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：貫 優美子

ローマ字氏名：(NUKI, yumiko)

所属研究機関名：九州保健福祉大学

部局名：社会福祉学部

職名：講師

研究者番号(8桁)：00369167

(2)研究協力者

研究協力者氏名：清水 径子

ローマ字氏名：(SHIMIZU, mithiko)